

この会の果たしてきた歴史的貢献と今後の課題

福 本 安 正*

「新潟応用地質研究会」が1962年に創立してから33年になりました。33年前と言えば、地すべり等防止法が制定して4年目で、全国的にはようやく地すべり調査が開始されようとしていた時期でした。先進県の新潟県砂防課ではすでにボーリング調査を行っていましたが、全国的には稀な存在でした。治山課と農地部のボーリング探査の開始は1962年からでした。と言っても現在のように県が調査業者に委託して行うのではなく、県がボーリング機を購入して、県の地すべり調査担当技師がレバーを握ってコアを採取し、土質柱状図を書き、調査報告を作っていたのです。

また、当時は地すべり調査を行うコンサルタントも少なく、私の記憶では憐日さくと興和の2社だけであったと思います。だから地すべり調査は県自身が行うことになっていたのです。これが調査業者に委託するようになったのは1965年以降のことで、地すべりを始めとした調査委託が開始され、急速な委託の増大ともなって調査業者が急増しました。その要因をなしたのは新潟県における災害の発生と予算の急増でありました。当時発生した主な災害を挙げると

松之山地すべり	1962～1963年
新潟地震	1964年 6 月
羽越水害	1966年 7 月
羽越水害	1967年 8 月
大所地すべり	1967年 5 月
水沢新田地すべり	1969年 4 月
高場山トンネル地すべり（飯山線）	1970年 1 月

等でありました。

これらの災害が契機となって、大学の研究者と官庁の技術者、業界の技術者の交流が密接に諮られるようになったのですが、その役割を大きく演じたのが「新潟応用地質研究会」でした。地すべりを始め、地震、水害等の災害を地質学見地にたって解明する技術が飛躍的に進みました。それと共に、この会は地質専門家だけの集まりだけではなく、各専門分野の技術者の調査・研究検討の場となったことです。当時、地すべり学会はありませんでした。地すべり学会が創立したのは1965年で、その新潟支部ができたのはその7年後でした。それだけにこの会の役割は大きく、多くの研究者や技術者を育てまいりました。

33年を経た現在、技術的専門分野が拡大し、それに携わる専門家も多面化し、この会の構成員も多様となってまいりました。今後この会の発展を展望するとき、「新潟応用地質研究会」の名称を現況にふさわしく考える時期に来ているのではないのでしょうか。このことをみんなで考えてみようではありませんか。

* (株)新協地質技師長